『不二彦と柴三郎』～後編～
―医師会のあるべき姿―

北区支部　池　本　吉　一

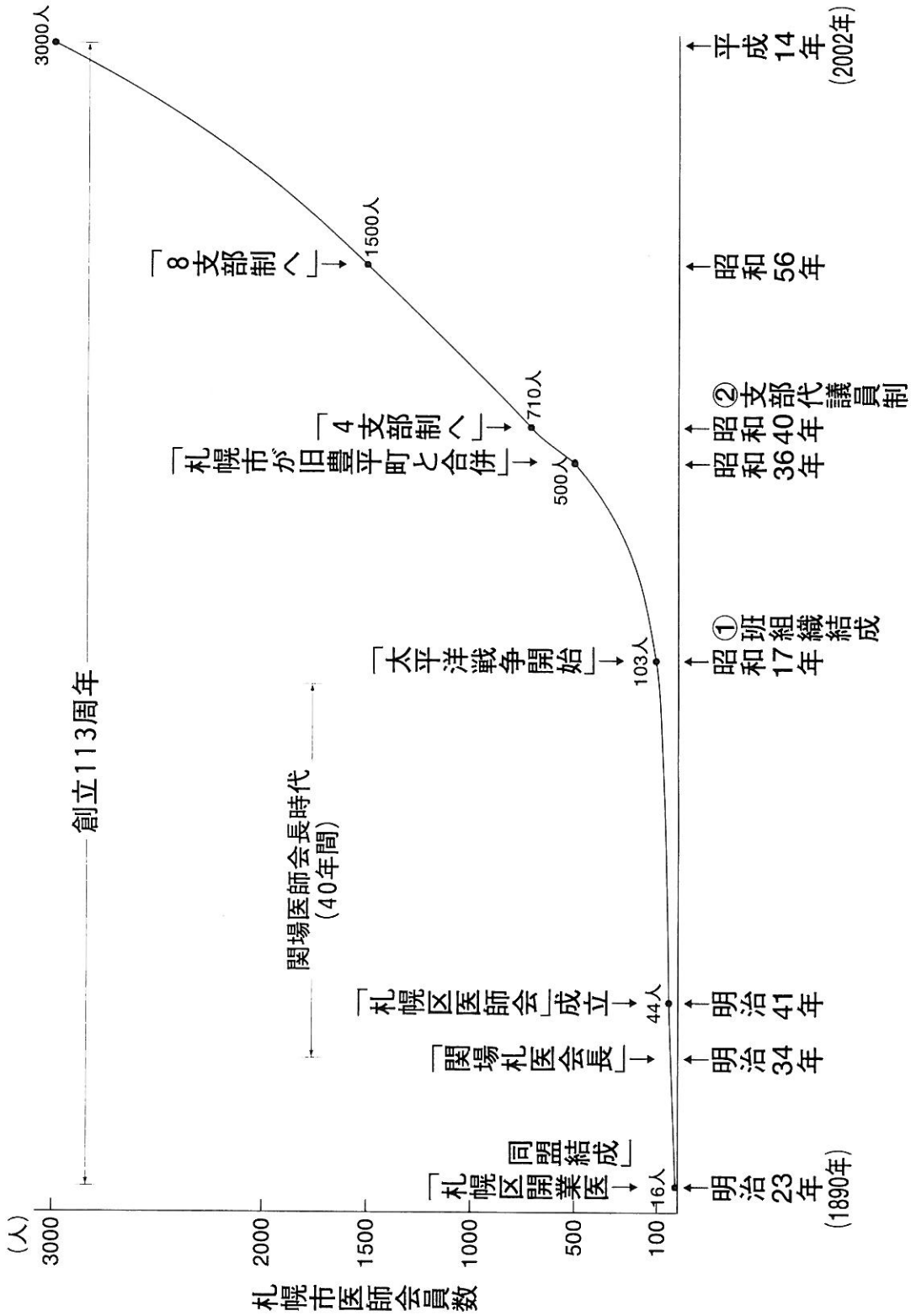
私は札医通信No.437で、札幌市医師会の100年以上の歴史について述べた。今回は、その史実に基づき、今後の医師会のあるべき姿について、私の意見を述べてみたいと思う。また、ここに前編で示した図表を掲げた。その図表の横軸の長さは、一世紀以上の時間を表し、縦軸は、札幌市医師会員数である。

明治34年、関場不二彦が、医師会長を、40年間（札医創立113年間のうち、35パーセントを占めている）務めていた時代は、会員数が、ほぼ50～60名程度、ほぼ横ばい状態で推移していた。最も安定して、今日の札幌市医師会の設立目的を、遺憾なく発揮出来た、いうなれば医師会の成熟期であった。当時、北里柴三郎や、野口英世らが輩出され、日本医学史上、世界的名声を博した時代でもあった。その北里柴三郎は、日本医師会会長となり、まさに、当時、社会から、医師会の存在を認められ、厚い信頼感が寄せられていた時代であった。

その後、第二次世界大戦を契機に、医師会員数が増加し始め、指数級数的増加を途げていたが、班組織の導入、支部制代議員制を取り入れた事により、関場会長時代に完成された理念を、何ら支障を生ずることなく、札幌市医師会は、発揮し、実行にうつしてきた。さらに、時代の要請で、社会福祉関係事業などを受けると、当時の医師会員達の英知をもって、それら事業を着実にこなし、規模を拡大し続けて、今日に至っているのである。

今、現在、札幌市医師会は、上埜光紀会長のもと、総務、財務、政策、地域社会、救急医療、学術厚生、医療保険、看護学校など、主に８つの部門に、事業規模を統廃合しようとしている。100年前の不二彦らが作り上げた理念を、合理的、効率良く実践しようとしているのである。そこで、私より提案があるのであるが、折角、11もの支部があるなら、これら業務を11支部に分担させては如何であろうか。

各部会の部長は、支部長とし、支部長が必要に応じて、分担した会務に相応しい人材を、理事として、他支部より指名、他支部との会務の整合性を企てるのである。私思うに、各班の班長は、札医の代議員を兼ねているが、その医療地区で、開業した順番に、その地区に相応しい先生がきわめて民主的に選ばれているように思う。従って、その会務の担当部会の構成員の主役は、それら班長達であり、班長はさらに、必要に応じて、班内の先生を複数名指名、会務を補佐させては如何であろうか。すると、結局のところ、部会の分担人数は、理事も含め、現有人員数は、最低限は必要となるであろう。従来の方法は、確かに、各支部ごとの公平性を厳格に保っている形にはなっているが、出席して来る役員の先生は結局のところ決まりきった人しか参加していないところが多いのではないだろうか。何か発生した問題を深く掘り下げて、充分に討論する時間が足りているだろうか。只でさえ、忙しい日常診療のあい間に、月に１回も２回も、１カ所に集合するだけでも、この広い札幌圏内を移動するだけで、時間の無駄ではないだろうか。この事は、他支部の役員の先生方からも、良く耳にすることが多い。また、現在の体制では、執行する事業内容を、全11支部に強いるため、そのほとんどが、前年度を踏襲するケースが多く、組織活動全体が硬直化する傾向が強まってくる。だから、逆に、組織に何か新しい動きを、会員全体に及ぼそうとする時


(人)
3000
2000
1500
1000
500
100
札幌市医師会員数
3000人
1500人
710人
500人
103人
44人
16人
創立113周年
関場医師会長時代
(40年間)
「8支部制へ」→
「4支部制へ」→
「札幌市が旧豊平町と合併」→
「太平洋戦争開始」→
「札幌区医師会」成立→
「関場札医会長」→
「札幌区開業医同盟結成」→
←平成14年(2002年)
←昭和56年
←昭和40年 ②支部代議員制
←昭和36年
←昭和17年 ①班組織結成
←明治41年
←明治34年
←明治23年(1890年)

に、時間、人、金が掛かり過ぎる傾向がある。だからこそ、特別区構想的というか、何というか、全11支部に、会務を逆に分担させて、競争意識が生まれる工夫をするのである。

支部役員会は、定時的に1カ月に1回の割合で会議を行っているが、話し合っている内容と言えば、その大半を報告事項に終始しているのが実情で、これでは、何のための役員会が不明である。他人の事を批判する暇があるのなら、まず、我が身を変革させてみては如何であろうか。トップダウン方式は、もう限界に達していると。報告会は、支部長会－班長会議のラインで行わせてみてはどうであろうか。そして、各支部ごとの会務の全支部へのバランスを、支部長会議で、理事、あるいは、副支部長を同席させ、調整するのである。この方式で事業を行えば、参画している人材、時間、そして与えられた予算を、重点事項に、より効率よく、集中的、創造的に投下することが可能となるような気がする。各部会における、真の医師会の主役である班長らの手によって、その時代にマッチした、より柔軟で、機動的、現実的な政策を打ち出すのである。

以上の様にすると、会員の最高意志決定機関である代議員会、総会の現場で、混乱を招くのではないかという反論があろう。しかし、この100年間、医師会の理念の変更はなく、その事業の大半が、前例を踏襲しているものばかりである。何か、具体的に不明な点があれば、きわめて優秀な医師会専属の職員があたかも官僚のように働き掛けてくれて、問題解決は、極めてスムースに行く。従って、我々、多種多様な価値観を持った医師会員は、それら議案を、班会議を中心に、その時代にあわせ、政治的な判断を下す事のみに、エネルギーを注ぐべきである。支部長会の仕事量が、その点で増えるかも知れないが、増員、補強すれば解決する話であろう。

ところで、すでに代議員をされた先生なら御存知であろう、折角、班を代表され、仕事の忙しい時間を割いて、医師会館まで出向き、その代議員会で、長々と、無味乾燥なお話につき合わされた経験はないだろうか。班長として出席して来ている以上、いずれの先生もが、その自覚を持ち、その地区を代表して来ているのに、これでは、一挙に、医師会に対する失望感が生じるのは無理からぬ事ではないだろうか。であるのであれば、せめて、班長たち、自らの意志で、その政策決定をさせるのが道理というものではないだろうか。自らの意志で創造され、企画された事業となれば、当然、責任感が生じ、医師会活動に無関心ではいられなくなり、他支部の仕事ぶりが気に掛かるようになり、何とはなしに競争意識が生まれ、結果的に医師会全体が盛り上がるのではないだろうか。さらに、これから先、如何なる時代が到来しようとも、多種多様な価値観、多芸多趣味な、医師会員にとって、多種多様に対応することが可能となり、いかなる医師会員からも信頼される医師会の明るい未来の展望が開けそうな気がするのである。

元来、医師会は、その構成員より考えると、知的頭脳集団であると、私は思う。人間の大脳が、解剖学的に、その機能を局在させて働かせているのに、すべての機能を平等に、脳全体に隈無く分担させ仕事をさせ続ければ、いずれ、その脳は、統合失調症に陥りはしないであろうか。

今、医師会は、社会より不信の目で見られ、一方、内部から、会員より不満の声があがり、その活動に閉塞感が漂っている。医師会が、総動員法発令状態となっていると感じているのであれば、温故知新、班組織成立の時代にたちもどり、班中心の活動から、下位上達、突き上げ方式で、医師会組織の活性化を企ってはどうであろうか。

歴史的に、医師会、発足当初の不二彦会長時代の総会員数だけで、今日の1つの班の総人数である。班会議の決定事項が、医師会全体の総意だというのであれば、こんな楽な事はない。班長が即、不二彦会長時代の医師会長なのであり、まさに、社会のニーズに合せ、より機動的で、より社会にマッチした慈善事業を行うことも思いのまま、不二彦会長時代の医師会活動

は、医師会史上、絶頂期にあった時代で、理想的な医師会運営が出来たであろう。その上、その時代の日本医師会長が、北里柴三郎、更に、日本人医師、野口英世が、アフリカへ渡り行った業績を思う時、まさに、日本の歴史上、その名を残すような人物が医学界に出現していた時代、社会の誰もが、医師に対して絶大な信頼感を寄せていたことは想像に難くないであろう。今、我々、医学界において、現在、果たして、このような人物がいるであろうか。去年、ノーベル化学賞に輝いた田中耕一氏のような。

関場会長時代の医師会は、今や昔の話、「古事記」物語となってしまった。構成人数は、今や、不二彦時代の50～60倍の人数を擁した集団となってしまっている。以前、私は、北区支部役員会で聞いた、ある班長の先生の言葉が思い出される。

「我々、医師会員の個々、個人の人物は、素晴らしい人格者であるのに、集団になると、エゴイズムの塊と化す。こんな医師会を、社会の誰がいったい支持してくれると言うのであろうか。」

（平成15年　正月　記）

（篠路整形外科）

〈表紙絵〉

「初夏の北大農場風景」

遠い昔に描いた北大農場の絵です。この風景の右側にあの有名な、歴史的重要木造建築物となっている穀倉庫があります。日曜にはいつも誰かがここで写生しています。この絵は私が若い頃描いた絵なので、まだみずみずしさがあります。私の手元にはこの絵しか緑陰随筆にふさわしい初夏の風景の絵はありませんでした。

岩隈　　勉（手稲区支部）